道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

三好礼子
エッセイスト・国際ラリースト
～http://www.fairytale.jp/～

「太平洋の日の出を見たら走り出し、日の入りまでに日本海で集まろう」。これだけの呼びかけで２０１３年に始まった「サンセット・サンライズ・ツーリング・ラリー（以下ＳＳＴＲ）」。プレ大会も入れると今年で5回目を迎えましたが、あっと言う間に名実ともに日本一のバイクイベントとなりました。合言葉は「太陽を追いかけろ！」。ルートは自由。ルールは道の駅やＳＡに最低5つは寄って休憩することと決められた道の駅にひとつは寄ることだけ（もちろん法規は厳守！）。終着点は車で海岸を乗り入れることができる石川県の「千里浜なぎさドライブウェイ」ですが、駆け抜けて仲間や主催者の声援の中でゴールすると、誰もが涙を流すという。今年は9月に行われましたが、生憎の雨風にも関わらず、44の都道府県から１８５６人が参加（うち、タンデムは71台）。私は初回から誘われつつもスケジュールが合わず実現できていないのですが、参加したライダーたちが入れ替わりで私のカフェに寄っては楽しい話を聞かせてくださいます。ゼッケンを外す人は殆どいないので、日本中のバイクがいつかゼッケンつきになるのでは？と思うほどのイベント愛着ぶり♪

彼らをＳＳＴＲの虜にした言い出しっぺは、実は20代からのバイク仲間の風間深志さん。バイク雑誌編集者を経て、バイクによるキリマンジェロ挑戦から始まり、パリダカールラリー出場、南極点・北極点到達、チョモランマ登攀（６００５m）、人力でのビンソンマシフ登頂（日本人で2人目）などの成し遂げた冒険家ですが、その生き方は半端ではありません。12年前、2度目のパリダカールラリーで飛び出してきたトラックに衝突し、左足の膝と足首に重度の損傷を負いますが、度重なる手術とリハビリの後、スクーターや四駆で大陸横断し、障害を持つ人とタスキで日本縦断と、以前より世界を駆け巡っているのです。

80年代から「地球元気村」というＮＰＯを作り、日本中の子供たちと自然の中で遊ぶ楽しさを共有してきた風間さんですが、復帰後はさらに「みんなで楽しいことをやる！」が強まりました。妹分の私が勝手に言わせてもらうならば、苦しい事故で得たのが「人の思い」と「モチベーション（夢）」だったから？事実、事故の前後では、まったくの別人。前もノーテンキで明るくて面白かったけれど、今は深みが全然違う。仲間も大勢いるので、東北の震災時では南三陸町に拠点を置いてみんなで4か月近くも活動をしていましたが、それは今でも続いています。その風間さんが「あの砂漠のラリーのゴール（ビクトリーラン）の感動をみんなに味わってもらいたい」と思いついたのがＳＳＴＲ。ゼッケンはそこから来たのだと思いますが、安全に長い旅を続けてきた後にある感動、自分や自然との関わり、仲間と再び集うこと。みんなが主役で、参加の数だけドラマがある。大風だった今年のイベントが無事に終わった後の風間さんのコメントは、「バイクの魅力の上うなものに触れ、バイクを人生の『生きる』喜びに結んでもらえたなら、素晴らしいと思う」だった。ただ道を走って集うだけなのに、参加者も主催者もボラたちも、みんな感動して笑顔になるって、やっぱり凄い。

カフェにやって来るＳＳＴＲなライダーたちも、生きていることが楽しくてたまらないオーラが漂っているので、最近はゼッケンがなくても「行ったね」と分かります。遊び心が伝染していったＳＳＴＲは、日本で生まれたバイク文化といえそう。来年は5月に開催とのことなので、今度こそはトレランレースをずらしてでも参加したいと思っています。普段なかなか会えなくても、そこで出会える旧友もいっぱいいるはず。さて、スタートは何処にしよう。初めてバイクでツーリングした伊豆の真鶴からだと512キロ。車で7時間だから、バイクなら完走ギリギリ？　なんだかドキドキしてきました。みんな待っててね～♪

地球を駆け回る66歳の風間深志さん。山梨の「道の駅みとみ」には、冒険を共にしたバイクなどが常設展示。

今年は17:58 の日の入りが目安。もちろん遅れても問題なし。道のりそのものがライダー達のメダルなり。

雨天のため屋内会場でのイベント開催。土砂降りキャンバーも大勢いましたが、ライダーは本当に雨に強い！

岩手から走ってきたライダー。ステッカーも見えてます。40代50代が最も多く、千キロ走る人もいたようです。

帰宅チェックポイントの我が家のカフェで思い出話。寄り道ありがとう。ライダーは友達作りの天才です。

九州の散歩道

絶景ドライブコース　やまなみハイウェイ

フリージャーナリスト　湯浅玲子

今回から九州各地のさまざまな散策道を紹介していきたいと思います。自然・食・文化と多様な顔を見せる九州の魅力が少しでも伝わり、多くの人に足を運んでもらえればうれしく思います。初回は九州が誇るドライブルート「やまなみハイウェイ」です。

日本百名道にも選ばれた「やまなみハイウェイ」は、大分県由布市と熊本県阿蘇市を結ぶ県道11号の愛称。九州屈指のワインディングロードとして知られ、森林の中を駆け抜け、くじゅう連山を眺めながらの高原ドライブ、そして阿蘇外輪山を下る道と、素晴らしい景色とドライブの楽しさがギュッと詰め込まれたようなコースです。

「やまなみハイウェイ」は春夏秋冬、いつ訪れても季節ごとの表情があり楽しめるのですが、私がいちばん好きな季節は秋。草原のススキが黄金色に染まり、空気までキラキラと輝いているようで、まるで別世界に来たかのようです。

周辺には観光スポットや温泉も多く、1年を通して多くの観光客が訪れます。筌の口（うけのくち）温泉はノーベル賞作家・川端康成が宿泊して執筆活動をしていたことで有名。ここで構想を練った小説『波千鳥』の中で、彼は近くの高原のことを「ほんとうに美しい夢の国がここに浮かんだような高原でした」と書き記しています。

変わったところでは「馬道（うまみち）」があります。「やまなみハイウェイ」と並行して走る文字通りの馬の道で、現在も乗馬コースとして使われています。馬だけでなく人間も歩くことができるので、普段は車で通り過ぎてしまう高原地帯の景色を、歩きながらゆっくり観賞することもできます。

そして、ぜひ訪ねてほしいのが「タデ原湿原」。山岳地帯に形成された湿原としては日本最大級の規模を誇り、２００５年にラムサール条約に登録されました。湿原と周辺の森林内には3つの自然研究路が設置されており、誰でも自由に散策することが可能です。このタデ原湿原は地域の人々の努力によって環境が維持されています。もともと湿原の環境が保持されてきたのは、この地で古くから行われてきた野焼きの風習のおかげ。また地元の人々がボランティアでゴミ拾いなどの環境保護活動を行っています。地域を愛する気持ちが、かけがえのない自然環境を守っているのです。

（写真は〝九州旅ネット〟フォトギャラリーより転載）

くじゅうの山並みを目指して延びる「やまなみハイウェイ」

昔ながらの「馬道」では人も馬ものんびりと楽しげです

ハッと思いました

十月と言えば「体育の日」。一九六四年十月十日東京オリンピック開幕を記念した祝日です。東京生まれ東京育ちの友人に聞いた話ですが、「甲州街道でマラソンの応援で旗を振ったんだ、小学生の時」。

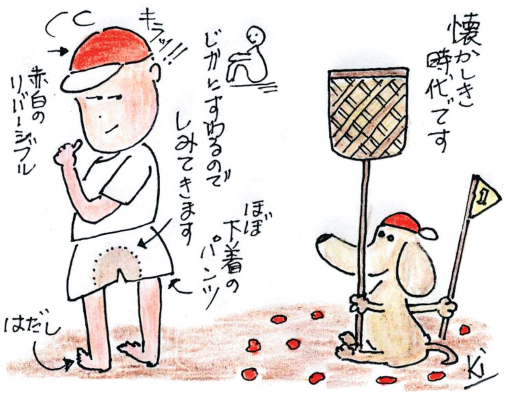
地方の田舎で過ごしていた私はテレビで見たような見てないような？大人たちの話で聞いたような聞かなかったような？そもそも家にテレビはあったかな？

確実に言えるのは、都会と地方は今では想像もつかぬ程情報の格差や裕福さの格差が大きかったと言うことです。

はっきり言って近年のオリンピックはその本来の意味が薄れて、完全に商業ベースのイベントになっています。それを悟られまいと感動的な所が不自然に切り取られて全面に出されることもあるようなど。

ここでちょっとした疑問を一つ。夏季オリンピックは南半球のオーストラリアやニュージーランドで開催することは無いのかな？季節は冬ですから、冬季オリンピックになっちゃう？

子供ながらに昭和の東京オリンピックを意識したのは、開幕から二年後の一九六六年十月十日からです。



だって祝日になったのですから。以来、秋は運動の秋として意識され、運動会も盛んだったと思います。今ではその運動会そのものが消えているとか・・・あわせて秋といえば、食の秋です。農作物、特にお米の収穫時期ですからね。もう一つ秋と言えば、読書の秋です。秋の夜長の過ごし方として読書に親しもうと言うことです。

さあ今は、秋と言えば何が出てくるのでしょう。とりあえずは、秋祭りでしょうか。これはこの先もずっと残っていてほしいものですが、近頃はハロウィンが盛んです。そもそもは収穫祭の一種ですから悪くはありませんが、できれば日本の伝統を食いつぶす程のバカ騒ぎの勢いにはなってほしくはありません。

そして、交通機関の充実やモータリゼーション（もう古い言葉ですか？）つまり自動車の生活必需品としての普及に伴い、レジャーの秋も押えておく事必要があるでしょう。レジャーの秋＝どこもかしこも混み合ってます＝道路も渋滞＝イライラ＝疲れの秋、が定番になっていますが、それでもレジャーの秋です。

玄関を出てから、楽しんで無事に「ただいま」と玄関を開けるまで、「木登り名人」になったつもりで気を抜かず秋のレジャーを過ごしましょう。